

2019 年 第 16 回ジェンダー史学会年次大会
自由論題報告要旨一覧

【個人報告】

部会 A

◆川合 真木子 (東京藝術大学)

アルテミジア・ジェンティレスキの自画像——17 世紀における女性画家の自己演出戦略——

アルテミジア・ジェンティレスキ (1593-1654 年以降) は 17 世紀イタリアで活躍した女性画家である。近代美術史において彼女の存在は長らく等閑視されてきたが、フェミニズム運動の盛り上がりによって、特に 1970 年代以降、その業績が再評価されるようになった。メアリー・D・ガラードのモノグラフ (Garrard 1989) やウォード・ビッセルのカタログ・レゾネ (Bissell 1999) 等の刊行により、歴史に名を残した稀有な女性画家として、アルテミジアは欧米ではよく知られた存在となった。

アルテミジアは多くの自画像を描いた。比較的古くから知られ、議論を呼んだ《絵画の寓意としての自画像》(ハンプトン・コート宮殿蔵) は、現在もアルテミジアという画家のイメージを形作る上で重要な役割を果たしている。一方、彼女の作品に関する研究の進展と共に、20 世紀の後半には、次のような作品が、新たにアルテミジアの自画像として認められるようになった。1987 年にロンドンのサザビーズに出品された《女性殉教者としての自画像》(個人蔵) や、1998 年にやはりサザビーズに出された《リュート奏者としての自画像》(ミネアポリス、カーティス・ギャラリー蔵) である。こうした新帰属作品により、それまで知られていたハンプトン・コートの作品に限らず、彼女が様々なタイプの自画像を描き、試行錯誤していたことが明らかになった。また、2018 年にはロンドンのナショナル・ギャラリーが、新たに発見されたアルテミジアの《アレクサンドリアの聖カタリナとしての自画像》を購入している。これらの諸作品について、未だ十分な議論が尽くされたとはいえない。

聖女や音楽家に扮し、趣向を凝らして描かれたアルテミジアの自画像は、彼女のキャリアにおいてどのような意味を持っていたのだろうか。17 世紀のイタリアでは、コレクターが画家の肖像を所有することは決して珍しくなかった。従って、アルテミジアが様々な形で描いた自画像は、主に顧客に対する彼女の自己演出戦略を表していると考えられる。女性画家として、男性の同僚たちとは異なった社会的状況に置かれていたアルテミジアは、その時々環境において、より有利に注文を獲得するために、どのような自己演出を行ったのだろうか。自画像の分析を通して、年代別にこれを検証する。

さらに、アルテミジアが打ち出した自己イメージをより明確に把握するため、他の 17 世紀の画家たちが描いたアルテミジアの肖像画を比較対象とする。近年見つかった、シモン・ヴェエによる《アルテミジア・ジェンティレスキの肖像》(ベルガモ、個人蔵) に代表されるこうした作品は、同時代の人々が彼女に対して抱いていたイメージを知る手掛かりとなる。アルテミジアの自画像と、他の画家が描いたアルテミジアの肖像画との比較を通して、彼女の自己演出の特徴を見出すと共に、彼女のキャリアにおいて自画像の果たした役割を考察する。

◆富田 裕子 (長野県立大学)

イングランド、レスター州のサフラジェット、アリス・ホーキンスの生涯と業績

昨年、英国の 30 歳以上の女性に参政権が与えられてから 100 周年を迎え、この輝かしい史実を祝う記念行事が、英国全土で催された。中部地方のレスター州では、昨年 2 月に婦人参政権運動の過激派として知られた Women's Social and Political Union (略して WSPU、女性社会政治連合) のレスター支部で活躍した、労働者階級出身の Alice Hawkins (アリス・ホーキンス) の銅像が、市の中心部に建てられた。この銅像はアリスが右腕を上げ、「婦人に参政権を！」と書かれた襷をかけ、婦人参政権の必要性を力強く演説してい

る姿をよくとらえたものだ。その除幕式には1000人も地元住民が参列し、アリスの功績を称えた。

また‘Vote and Voice’と題する国会議事堂内で昨年9月に催された大規模なイベントでもアリスゆかりの品々が陳列された。更に今年の2月にはレスター市の博物館で、アリスの生涯とWSPUの会員としてのレスター州における婦人参政権の発展への彼女の多大なる貢献にスポットライトを当てた展示会が開催され、地元民の関心を集めた。

1906年にWSPUの本部がロンドンに移ってから、WSPUは中流階級の女性の運動へと変わっていった。しかしアニー・ケニー同様、労働者階級出身のアリスが、仕事、家事、子育てをしながらも、過激な参政権運動に身を投じ続けたことは、婦人参政権運動史の中でも貴重な史実である。そのためかアリスは現在英国で最も注目されているサフラジェットであると言っても過言ではない。しかしながら同国においても彼女に関する研究は今でも進んでおらず、私の知るかぎりでは、Richard Whitmore氏の著書、*Alice Hawkins*しか存在しない。従って日本では彼女の名前すら知られていない。

この現状を踏まえて、今回の報告では、最初にアリスの生涯を簡単に紹介した後、彼女が婦人参政権運動に参加した動機、並びに穏健派のNational Union of Women's Suffrage Societies (略してNUWSS、女性参政権協会全国同盟)ではなく、過激派のWSPUを選んだ理由も探してみたい。更にアリスがどのようにして夫の理解と協力を得て、靴工場で働きながら、家事と6人の子供を育てながら、活発な婦人参政権運動を続けていくことが出来たのかを詳しく説明したい。

報告の後半では、アリスのサフラジェットとしての活動に焦点を当てるつもりだ。WSPUの会員たちの行動は、1913年以降、私有物、公共物に関係なく投石して、窓ガラスを壊したり、空きビルを焼いたり、爆破したり、電話線を切断したりするといったように、極めて過激化した。アリスもレスター州だけでなくロンドンでもこのように過激な行動をとって、幾度も警察に逮捕され投獄された。彼女のこのような行動をレスターの地方紙、全国紙はどのように報じたのか。また一般大衆の反応はいかなるものであったのか、追及してみたい。最後にWSPUは英国全土に70の支部を持つまでに発展したが、アリスが中心メンバーであったレスター支部の活動は、ロンドン本部や他の支部の活動といかなる点で異なっていたのかも比較考察するつもりである。

◆ 秦 佳代 (北海道大学)

イレーヌ・ネミロフスキーと戦間期における女性作家活動

第一次大戦と第二次大戦に挟まれた戦間期と呼ばれる時期、フランス文学史に登場する女性作家は皆無に近い。本発表は、戦間期にフランスで作家として活躍したイレーヌ・ネミロフスキー(1903—1942)の活動を、ジェンダー史の観点から辿ることにより、この時代の女性と文学の関係に光をあてることを目的とする。アウシュヴィッツの犠牲者であるネミロフスキーは、2004年『フランス組曲』によってフランス三代文学賞のひとつであるルノー賞を、死者としてはじめて受賞した。この受賞によって彼女の名前は現代において広く知られるようになった。しかし主に関心はユダヤ人であることに集まり、女性作家としてはあまり注目されてこなかった。

戦間期、フランスで女性が作家として認められると同時に生活の糧を得るのは、非常に難しく稀なことだった。ネミロフスキーはこの二つを実現するために戦略的に作品を発表していたと考えられる。ピエール・ブルデュエの概念を援用すれば、作家として認められる、すなわち芸術的評価を意味する「限定生産」の領域と、生活の糧を得る、すなわち商業的成功を意味する「大量生産」の二つの領域でネミロフスキーは作品を発表していたのだ。

女性でありながら作家として認められるためには、作家としての才能がある以外にも特別な存在であることが必要だった。ジョルジュ・サンドは異性装によって、コレットはレズビアン経験を綴ることによって性的逸脱をアピールしていた。ネミロフスキーは、フランス語を巧みに操るユダヤ系亡命ロシア人としてだけでなく、批評家や他の作家から「男性的」と評価される作品を描くことによって特別な存在として評価を得ていた。当時の女性作家による「女性的な作品」とは異なる作品を作り出すことによって、歴史ある文芸雑誌『両世界評論』に作品が掲載されるという「限定生産」の領域における成功を収めるに至る。

作家として生活の糧を得るために、ネミロフスキーは爆発的な発行部数を記録していた『グランゴワール紙』に連載小説を書き、収入を得ていた。この新聞というメディアは「性的に分割された空間」であり、連載小説はとりわけ女性に人気を博していたことが『新聞小説』においてアン・マリ・ティエスによって指摘されている。ギゾー法やフェリー法によって高められた識字率、さらに鉄道網の発達、印刷技術革新による新聞というメディアの躍進によって、都市から地方に至るまで、数多くの女性に新聞連載小説は享受されていた。この「大量生産」の領域である新聞において、女性による、女性のための、女性についての作品をネミロフスキーは生み出していた。

このようなネミロフスキーの作品において、ステレオタイプ化された女性の登場人物が繰り返し描かれることが指摘されている。しかし、そのステレオタイプが時とともに変化していることは注目されてこなかった。母と娘の対立を通じて描かれた女性の「老い」とアイデンティティーの主題は、次第に女性と社会、女性と戦争の主題に移行していく。第一次大戦から第二次大戦に向かう期間、社会における女性の役割への問題意識がネミロフスキーの作品に大きな割合を占めていったことを見逃してはならない。

◆半澤 忠彦（青山学院大学）

1930年代スペインの右派運動と女性の政治化

本報告では1930年代スペインの第二共和制期における右派運動と女性の政治化について扱う。具体的には、20世紀初頭から活発化した様々なフェミニズム運動とそれに対する反動として生まれた反フェミニズム運動の関係性を整理しつつ、保守的なカトリック系団体やこの時期に登場したファシズム団体が、どのような考え方に基づいて女性を政治化・組織化していったのかについて明らかにする。

19世紀のスペイン社会においては、女性が置かれた社会的状況の改善や権利の向上に関する関心が高まっていなかった。女子教育の拡充や女性の家庭外労働を認めるべきであるとする主張はあったし、女性の政治的権利を主張する雑誌も存在したが、フェミニズムが運動として本格化したのは20世紀に入ってからであった。

20世紀に入ると女性の置かれた状況を改善することを求めるフェミニズム運動が本格化した。第一次世界大戦に参戦しなかったスペインの場合、参政権を求める運動が本格化したのは1910年代の終わりであった。1920年前後から登場するフェミニズムの諸潮流について、同分野の代表的研究者の一人であるナッシュは、①社会カトリシズムに基づくもの、②穏健派フェミニズム、③急進的フェミニズム、④（地域主義の）カタルーニャ主義のフェミニズム、の4種類を提示しているが、それらの主張の主要な相違点は、女性参政権に対する態度というよりも、婚姻や離婚に関して女性に不利な民法の規定を改正するか、女性の職業選択の自由や男女同一賃金を要求するか、女子教育をどの程度促進するか、女性著者による出版物に対する公的助成をどうするかといった論点だった。

この中でも①のカトリック系女性団体を中心に展開されたフェミニズム運動は、妻や母としての女性の役割を肯定したり、女性労働者の待遇改善を労使協調的な範囲で主張するなどの限界を抱えていた一方で、自治体レベルでの女性の政治参加を初めて実現した。これは社会の変化に対して右派の中から自分たちの都合の良い形での女性の社会化を推進する動きが出てきたことを意味していた。

1931年に第2共和制が誕生すると、女性の被選挙権が認められて女性議員が3名選出された。33年の選挙では女性が初めて投票権を行使した。しかしながらカトリック教会など右派勢力による女性への影響力を恐れた共和主義者や左派の一部は、女性参政権の付与に反対していた。女性議員でさえ、賛成したのはそのうちのたった一人だけであった。一方で右派団体は、政治と社会の変化に対応して女性部を創設し、女性の政治化を推進したが、そこでは反フェミニズムが掲げられることになった。

本報告では、以上のようなスペインにおけるフェミニズムの登場と反フェミニズムの出現の経過を整理しつつ、20年代独裁期のカトリック勢力が、30年代に第二共和制下の右派勢力を形成していく中で、保守的な社会カトリシズムに基づくフェミニズムから反フェミニズムへとどのように重心を移していったのか、また、反フェミニズムであるファシズム団体の女性部がどのように登場したのか、背景となった思想や女性像などを手がかりに分析したい。

部会 B

◆水野 道子 (奈良女子大学)

手技をめぐる対立軸としての女/男

表題の手技について、今日でこそ保育分野で「手技 (しゅぎ)」という語を聞くことはないが明治から昭和にかけて長期にわたり保育内容の一つとして日常的に使用されていた用語である。教育史における幼稚園創設者フレーベル (1782~1852) の保育理論である恩物 (おんぶつ) の流れを汲み、実際の手技の中味に関してはおおむね造形に相当する部分を含んでいた。しかし手技がカバーしていた範囲は広く、その具体的な項目の拾い方は決定されたものではなく明治期以後複数の有力保育関係者各々の幼児教育指導書から窺うことが出来る。その著作物の中で恩物あるいは手技の中から各種拾い上げて題材を取り上げてひとつひとつ解説を試みていた。また当時の保育者たちは実際に幼児教育の現場で多くの時間を割いてその手技を幼児らに実践していたとされる。今回の発表では、この手技をめぐるその取扱いにおいて官対民、女対男とされる対抗軸が存在しているとする考えの根拠及びなぜそうなのかとする要因を検討していきたい。

日本への恩物の導入は 1876 年 (明治 9 年) に開園した東京女子師範学校附属幼稚園であるとされる。手技という用語は、教育関係分野においては 1899 年 (明治 32 年) 「幼稚園保育及設備規定」の中で保育項目のひとつとして登場してから用いられている。その意味する内容は手で作業を行うこと全般を網羅するというよりもフレーベルの恩物の内から取捨選択された内容を指していた。それに先立つ 1893 年 (明治 26 年) 女子高等師範学校附属幼稚園主事の中村五六により手技を保育科目として採用し恩物を簡素化していく時に使いだしたことで知られている。(また同幼稚園分室では手細工とも呼称されていた。) その後 1926 年 (大正 15 年) の幼稚園令においても手技は存続したのち、戦後 1948 年 (昭和 23 年) 保育要領刊行時に姿を消した。恩物を推進する派、恩物を批判する派が民と官、女性と男性と符合していること、主事の中村五六の恩物の簡素化がその後の手芸が女子のものであるとする契機となったこと、神戸の頌栄保姆伝習所教員和久山キノの活動が官民の所属に関わらず女性保育者に大きな影響力を及ぼし恩物をはじめとするフレーベルの理論推進に固守していたこと、またキノは男性教育家が京阪神聯合保育会、保育団体を主導することに懸念を示していたこと、等から手技をめぐる女/男と言う対立構造を明らかにする。

◆沈 韻之 (奈良女子大学)

創られた戦時食文化——「合理化」を目指す戦時家政学を背景として——

十五年戦争期、日本社会は前線と銃後に分けられた。物の不足に直面する総力戦体制下、資源や人力を合理的に配置する必要性が生まれ、政府は銃後国民にあらゆる物資、特に食料の節約を要求した。銃後の戦争遂行として、節約運動が拡がり、公的空間だけでなく私的空間 (家庭) 内の節約実践が重視され、節約を心掛ける家政は主婦の要務とされた。そのなかでも、節約と栄養を重視し、戦意高揚のモチーフを自在に考案する家庭料理が理想化された。

本発表は、戦時中の婦人雑誌の調査から、戦時家政学の影響を受けた戦時家庭料理を、【実用】(節約目的を達成する) と【演出】(戦意高揚のために施すアレンジや創作) の両方から分析し、戦時食文化の創出をジェンダー史視点から流れを捉えることを目的とする。

家庭内の節約実践は戦時生活のモデルとなる「戦時家政学」の言説に導かれていく。婦人雑誌や新聞などの「戦時家政学の言論空間」に参入するイデオログは、栄養学や家政学など専門領域の関係者にとどまらず、様々な分野に現われた。戦時家政の言説は戦時の婦人雑誌によくみられる事例を提供する「工夫」集とは異なり、主婦をはじめとする銃後国民に戦時に相応しい家政を習慣化させ、さらに生活文化として定着することを要請した。

この変革の任務は家計管理者、家庭料理の主な担い手である主婦に負わせられた。婦人雑誌は政府関係者や専門家・有名人の呼びかけ、主婦の学習・実践、読者投稿という三者をうまく接続し、戦前から整えたメディア空間を成熟させ、戦時家庭料理の確立に重要な役割を果たした。

以上のような戦時家政（学）言説を背景とし、食料・燃料節約に直面する家庭料理は、結果的に戦争遂行の食文化の誕生を促した。「戦時」という臨時的状況に対応するための家庭料理だが、新しい食文化として定着させようとするのは、戦争支援を促すと同時に、その長期化を黙認することを意味する、という矛盾が内包されている。そのため国民の反感を避けるために、食料と燃料の節約を目的としながら、この実用性を超え、戦時家庭料理には翼賛の意味が付与された。戦時食文化はいわゆる「古来の」「質素な」食を援用し、栄養学などの近代的知と「創られた伝統」が絡み合い、家庭料理の価値観をつくり変えようとする。

創られた戦時食文化が主婦の実践によって戦時家政学思想を具現化し、視覚と味覚を通じて自身も戦時プロパガンダの媒体（メディア）になる。節約運動は無償労働である家事に戦争遂行の意味を付与し、女性の地位向上を図る心情を巧みに利用するうち、「軍国の主婦」を作り上げた。「軍国の主婦」は食文化を通じて「少国民」育成に協力し、戦争遂行に有利な循環が形成されたことを明らかにする。

◆岩島 史（同志社大学）

農村における女性労働の変容と女性らしさの構築—高度経済成長期を中心に—

近現代日本の農家／農村女性の労働についての歴史的視点からの実証的な研究はほとんどなく、とくに家事・育児労働については不明のことも多い。近年出版された女性労働史に関する著作（総合女性史学会他編 2019）においても、近現代農村女性の労働実態についてはほとんど触れられていない。

他方で、日本の農業・農村研究においては、高度経済成長期以前の農村女性は過酷な農業労働と家事労働を担い、封建的な家族農業経営のなかで抑圧されていたが、戦後の生活改善普及事業（農林省主管）などによるエンパワーメントと高度経済成長期の農業・農村の近代化によって労働環境が改善され、家族内における「女性の地位」も向上してきたことが通説とされている。しかし、英語圏の農村研究では、このような家族農業経営の発展や「女性の地位」は、農村における女性らしさを構築する言説として、とくにそこにおける性別分業のあり方、伝統的な女性の役割に注目した研究が蓄積されている。

本報告は、高度経済成長期を中心に、農村における女性の労働の実態と変容を、農村における女性らしさの構築という視点から明らかにすることを目的とする。高度経済成長期の農村は、都市との生活水準格差の縮小にむけて農業の規模拡大、大型機械の導入がすすめられ、兼業化も進んだ。あわせて、家電製品が農村にも広く普及し、生活が大きく変化した時期であるが、同時に農村女性の「過労」が社会問題化していた。本報告では、まず過去に行われた生活時間調査を用いて、農村において女性はどうのような労働をどれくらい担っていたのか、家族農業経営における女性の立場の多様性（姑、嫁、娘）に着目して歴史的に分析し、嫁の立場の女性が担った労働は「近代化」の前後で単線的に楽になってはいないことを明らかにする。続いて、生活改善普及事業の体験文集などを用いて、農村において女性が担っていた労働の意味が農業の近代化や家電製品の普及に影響を受けて変容していく過程を分析し、農村における女性らしさの構築過程をえがく。

以上の分析を通して、本報告では依然として不明なことの多い農村の女性労働の実態と変容の一端を明らかにし、日本の農業・農村研究において通説となっている近代化と女性の地位向上の言説を批判的に問い直すことをめざす。

◆柳原 恵（日本学術振興会特別研究員 PD）

ミニコミの分析から見る戦後日本の「地方」における女性運動

2000年代以降、日本における第2波フェミニズムであり「現代フェミニズムの始まり」（牟田和恵 2006 「フェミニズム運動再考」『ジェンダー家族を超えて』新曜社）とされるウーマンリブを軸として現代フェミニズム運動史を再考しようという試みがなされてきた（上野千鶴子 2006 「戦後女性運動の地政学」西川祐子編『戦後という地政学』東京大学出版会）。しかし、研究対象となるのは東京など都市部の運動が中心であり、「地方」の動きを視野に入れた女性運動の全容はいまだに解明されていない。本研究の目的は、戦後日本の「地方」における女性運動のありようをミニコミの分析を通じて明らかにすることである。ここでの「地方」とは、三大都市圏以

外の地域を指し、ミニコミとは団体あるいは個人が発行する非営利の逐次刊行物を指す。

分析対象は1950年代から2000年代にかけて各「地方」において発行されたフェミニスト的視点に基づくミニコミである。草の根のフェミニズム運動におけるミニコミは、マスメディアでは取り上げられないジェンダー問題を提起し、女性たちの意見を主張する場であると同時に、問題意識を共有する者同士の集うコンシャスネス・レイジングの場であり、またインターネットのない時代において、各地の女性たちが直接つながるためのメディアでもあった。ミニコミを研究の対象とする際、それらが発行されたコンテキストの中に位置付けながら読むことが求められるが（平野泉 2013「研究資源としての『ミニコミ』」『情報の科学と技術』63号10巻）、草の根の女性運動、特にウーマンリブは即時性、匿名性の強い運動であり、発行者や発行経緯などの情報を得ることが困難な場合が多い。その中で、戦後女性運動に関するミニコミに特化した認定NPO法人WANミニコミ図書館はこの種のコンテキストも含めた情報を提供していることから、本発表においては当図書館の収蔵本を主な研究資料として用いる。

本発表では、まず各「地方」のミニコミ発行団体に関する基礎的情報とミニコミの発刊の経緯、発行時期、編集方針、主題などの情報を整理し、ミニコミから見える「地方」における女性運動の特徴を示す。

また、ミニコミは人と人との間に存在し、関係性の証ともなる性格を持つ（平野 2013）ことから、草の根の女性運動のネットワークを把握するのに適した研究資料であると考えられる。従来フェミニズムは文化・経済の中心地である東京を発信地とすると考えられてきたが、東北地方の運動が東京や他地域に波及した例も存在する（生理用品無料設置運動等）。ミニコミの分析を通じて、「地方」—都市間、「地方」—「地方」間の人的・思想的交流について考察する。

さらに、これまでの報告者の研究により、岩手においてはミニコミの発行を一つの核としながら、東北農村のジェンダー問題を問い直した女性たちの運動の存在が明らかになっている（柳原恵 2018『<化外>のフェミニズム』ドメス出版）。本発表では「地方」のミニコミにおいて主題化された問題について、金井淑子が『異なっている社会を』（明石書店、2008）において提示した「地方発」女性学という視点をを用いながら検討し、東京など都市部とは異なる近代化過程を経て、女性の自立や解放といった「近代の達成」と、近代化・産業化・都市化のもたらす矛盾が表出する「地方」特有の「生きがたさ」を抱えたと考えられる女性たちの活動について考察する。

部会 C

◆横山 鈴子

史料からみる「近世の主婦」像と共同体的集団—そして、賀川ハルヘー

1998年卒業論文「主婦をめぐる家と村の生活文化—天保四（一八三三）年奈良輪村鳥飼やす『萬覚帳』を中心として—」を提出して以来、主婦自身によって書かれた史料の発掘によって「近世の主婦」についての実証的研究を進めている。今日のジェンダー史の近世女性像は、近世社会が男性である武士によって構成する社会であるが故に女性を排除することとなり、その支配モデルが武家以外の庶民の諸階層にも強い影響を与えていたとする見方が定着しつつある。しかしながら、近世が武士階級の支配する社会構造であることは衆知ながら、庶民レベルの家に残された主婦自身の手になる金銭出納帳や手紙・日記などの史料を発見・蒐集・翻刻し史料集にするという文献史学に基づく方法で実証的研究を行っている、古来からの家刀自（里刀自）としての自立した伝統的主婦像が立ち昇ってくるのである。検証した「近世の主婦」像（袖ヶ浦奈良輪名主鳥飼家やす、伊藤仁斎母里村氏寿玄、京都亀岡代官家妻廣瀬千代、平田篤胤後妻おりせ等、必然的に文字を書ける女性が対象であった）は、主人に並ぶただひとりの女性として、家（共同体）の共同経営者的存在であり、彼女らの管理能力は民俗学で示す「主婦権」を越えて、家計を差配し、自立した女性の存在を証明するものであった。重要なことは、そうした権力構造の中で、女性の自立性・主体性を確保し続けた、近世文学では女房家主とも称される「主婦＝家刀自」の存在に光を当てることなのではないか？と考えている。他方、「近世の主婦」の存在しえた社会構造の探求を進めるため、「近世の主婦」と相似的存在である①旗本用人史料（野々村治平、上原家の用人大野の史料の翻刻史料集）や、②華道家元・蹴鞠家元につい

ての許状からの考察を進めると、日本近世社会にはさまざまな共同体が存在するが女性が存在し得る共同体は「民主的・進歩的」であり「反封建的」という感触を得ている。「近世の主婦」は、封建制身分社会にあって川島武宜のいう共同体的集団という社会型に存在し得たのではないかと思に至るのである。加えて、賀川豊彦の妻賀川ハルの会計帳・日記、豊彦との手紙について考察を進めると、そこに見えるのは明治以降の資本主義が生み出す都市中間層の「主婦」像ではなく、管理能力をもつ、古来からの自立した「主婦＝家刀自」像であり筆者の実証してきた「近世の主婦」像であった。豊彦とハルの宗教共同体は共同体的集団として明治以降の資本主義の社会に存在していたのであった。その要には夫婦共同体があったと指摘したい。報告ではこれまでの「近世の主婦」の研究経過と蹴鞠集団・華道集団に触れ、賀川ハルの主婦像に言及したい。

◆ 蔭木 達也 (慶應義塾大学)

平塚らいてうにおける「個人」と「性」——母性保護論争をめぐって——

母性保護論争について、西川祐子はこの論争の前史における平塚らいてうと与謝野晶子の立場の違いを「個」と「性」の問題に見出し、「晶子はおそらくらいてうほど「個性」が「母性」によって侵される恐怖と不安を大きく感じる事がなかった」と指摘している。その上で西川は、平塚が「個性」を「母性」によって乗り越える過程で、「近代生活で失うものの復活、かつてあった全体性の獲得」を主張したと整理しているが、果たして平塚の意図は「個性」に対して「全体性」を目指したものであったのか。本報告では、与謝野と平塚の相違点から、平塚が「全体性」ではなくむしろ「個人」の追求の先に「性」の重要性を見出したことを、思想的に跡付けるを試みる。

母性保護論争前史における与謝野と平塚の立場の「違い」「相違」は、絶対的なものを否定して諸個人の状態の多様性、流動性を求めた与謝野と、諸個人の間であってしかし他の誰でもない自己を確立することを求めた平塚という、「個」をめぐる対立に見ることができる。そして、平塚が主張するような「個人」、「自己一人に限られたる特性」としての「個性」は、与謝野の主張する流動的で不確定な「個性」を「滅却」し、「自己」を内的に徹底的に追求した先にあるものである。

しかし、「性」における「自己」を内的に追求した先では、他者の「自己」が自らの「自己」の内に「融合」することで「自他」が不可分となり、つまりここで「個性」が破れ、他者に向かってあふれ出る瞬間がある。さらに、「その結果として現れるかも計り知りがたい未来の子供」も同様に、「自己」の選択によってまさに「自己」の内から「計り知りがたい」他者の登場を予期する。つまり、「自己」追求の極点にある「性」の解放は、「個性」を破綻させ、「個人」を逸脱して自らを複数の「個」のあいだにあるものにさせる。それゆえ「性」は反「個人」的なものであり、「性」は常に「個人」を越え出た先の他者を前提としている。「個人」を破綻させずにおきたいと願う「自己」は、「個人」を乗り越えようとする「性」における「自己」との矛盾に直面せざるを得ない。この矛盾こそ、平塚が「性」を論じる必要のあった当の理由なのである。

母性保護論争で与謝野が主張するような、女性の経済的自立や、教育を受けること、政治に参加する権利を得ることなどにおいては、各人は常に他者とは別個の「個人」として自らがあることを求められ、その「個人」が揺らぐ瞬間は本来あってはならず、だからこそ母性保護論争の中で与謝野はまさに「女子の徹底した独立」を求めたのであった。そして同じ前提に立ちながら、しかしどれほど「個人」を突き詰めて論じたとしても、避けがたく「個人」が揺らぎざるを得ない契機が「性」にあるのではないかと問うたのが平塚であった。この背景には平塚自身の妊娠、出産という実体験があったにしろ、そこで深められている平塚の思想は単に個人の母親としての経験ということを超えている。なぜならここで、平塚において「性」というものが、それまでの「男性」対「女性」という枠組みではなく、「性」を乗り越えた先の新たな「個人」という枠組みへと変化していることが、はっきりと示されているからである。そのことで、問題は「性」を通して「人間」「個人」というものそれ自体を問い直すような議論へと接続されていく。

◆ 平塚 博子 (日本大学)

LIFE Asia Edition におけるジェンダー表象

1936年の創刊以来、アメリカのミドルブラウ的価値観を代表する写真週刊誌 *LIFE* は、戦中戦後を通じてアメリカの国内外において世論だけでなくジェンダー規範や女性のイメージの形成に、大きな影響を与えてきたメディアの一つである。第2次世界大戦中は深刻な労働力不足という問題を受けて、政府は従来男性領域とされてきた領域での女性の労働力の動員を図るべくメディアに戦時の新しい女性のイメージ作りを要請し、戦時報道を通じて *LIFE* もその一翼を担った。戦後タイムインク社は、旧枢軸国占領下の国々を含む海外での *LIFE* の販売再開に向けていち早く動きだし、*LIFE International Edition* をはじめとするさまざまな海外版も発行した。冷戦初期の時期こうした海外版の *LIFE* は国内版同様に、白人中流家庭をアメリカのイメージとして伝えることで、アメリカの民主主義と伝統的な家族像を肯定し、海外においても冷戦イデオロギーとそれを下支えする伝統的なジェンダー規範の普及と強化に貢献していった。

LIFE のミドルブラウ的な表象や価値観について、その矛盾や裂け目がより鮮明化するのが1960年代である。この時期アメリカ国内では、公民権運動に呼応するかのようフェミニズム運動やウーマンリブが活発化し、若者の間では対抗文化やベトナム反戦運動がおおきなうねりとなる。また、外交面ではベトナム戦争がますます泥沼化し、アメリカの推し進める冷戦イデオロギーの本質が国内外から大きく問われる時期でもあった。こうした動きは当然のことながら、国内外で発行された *LIFE* の報道にも少なからぬ影響を与えることとなる。この時期の *LIFE* は伝統的な価値観を踏襲しつつも、人種やジェンダーにおいてより複雑で多様な表象を提示することとなる。

LIFE Asia Edition は、アメリカ国内で既存の価値観が大きく問われた1966年から1970年という時期に、日本をはじめとするアジア地域の読者に向けて発行された。*LIFE Asia Edition* で報じられるアジアやアジアの女性たちも、冷戦イデオロギーや *LIFE* のミドルブラウ的ジェンダー規範を体現しつつ、時にそれを攪乱しながらその矛盾を陰画的に映し出している。本報告では特に *LIFE Asia Edition* で描かれるアジアの女性たちに着目しながら、ジェンダー表象を分析する。そうすることでアメリカのミドルブラウの想像力におけるアジア像とはどのようなものか、そしてそこに描かれるアジアの女性たちはいかに冷戦イデオロギーを強化しつつ攪乱しているのか、そこにジェンダーおよびエスニシティの問題はいかにかかわってくるのかについて考察してみたい。

◆片桐 真佐子 (奈良女子大学)

不可視化された独習者たち：メディアから学ぶアメリカン・キルト

本発表では、1970年代以降のメディアにおけるアメリカン・キルトの分析を通じて、日本でのキルト受容の形式から、70年代から90年代のキルト独習者をめぐる共同体の構造を明らかにする。

高度経済成長期、職任分離が進む都市部の「企業戦士」たちの妻たちは、家事と子育てに追われる「家庭戦士」であった。この現象は、戦後の女性解放から家庭回帰への道で、高度な教育を受けた女性たちがその力を活かすことなく専業主婦の道を選び取ることが、一つの社会の理想となっていたことを示す。

「家庭戦士」たちは、家族と過ごす住まいをより豊かで居心地のいい場にすることを目指し、自ら小物や装飾品などのインテリアを手づくりした。1975年と1976年には、アメリカのキルト収集家のコレクションが展示されると¹、「家庭戦士」たちはアメリカン・キルトに大いに刺激された。キルトは家庭内を主戦場とする自分たちの閉塞感を打破する一筋の光のように彼女たちには思われたのである。女性ならば、縫うことについての基礎的な技術を身につけていることが当然の時代であり、「家庭戦士」たちは縫う経験を活かしてキルトを作り始めた。つまり、アメリカン・キルトが彼女たちの将来にとって「投機的」媒体として映ったのである。さらに言えば、キルトを通じて古い裁縫ではなく、アメリカの主婦たちの文化によって自己実現を図ろうとしたのである。

キルトの「本場」はアメリカであるため、アメリカで直接キルトに触れた経験がある人びとが理想的な指導者となった。アメリカ帰りの主婦が自宅でキルト教室を開くと、主婦たちが通い始め、カリスマ的なキルターを頂点にヒエラルキーが生まれた。

こうした可視化されたキルト教室文化に対して、圧倒的多数の主婦たちは独学でキルトを学んだ。キルト

書籍の出版²、テレビのキルト関連番組の放送³、キルト専門雑誌の創刊⁴がそのことを裏づけている。そして、この状況が、キルト独習者たちを不可視化していった。

以上の点から、本発表では、キルトを取り上げたメディア分析を通して、これらの不可視化されつつもキルト文化の底辺を広げたと考えられるキルト独習者の存在を可視化することを目指す。そのことにより、スター的(カリスマ)キルターとキルトイベントなどによって歴史化されてきた日本のキルト文化に新たな視野が開かれるとともに、キルト文化受容の戦後史が明らかになるものとする。

¹ 1975年には東京の資生堂ザ・ギンザで「アーリーアメリカンのキルティング展」が、1976年には京都国立近代美術館で「アメリカのキルト展」が相次いで開催された。両展は、ジョナサン・ホルスタインとパートナーのゲイル・ヴァン・デ・ホッフというアメリカのキルト収集家が60年代から集めたアンティークなキルトのコレクションの一部であった。

² たとえば、『アメリカン・パッチワーク独習書』(ミコ岡田著、生活の絵本社、1978年)、『わたしのパッチワーク』(松浦香苗著、文化出版局、1979年)、『NHK 婦人百科パッチワーク・キルト』(野原チャック著、日本放送出版協会、1980年)などである。

³ NHK アーカイブスの番組リストでは、1976年頃からキルト関連のテレビ番組が確認できる。

⁴ 80年代後半に『パッチワーク通信』や『キルトジャパン』などのキルト専門雑誌が創刊した。

部会D

◆ 庄 文瀾 (奈良女子大学)

— 辛亥革命前後における男性の身体と政治—プロパガンダとしての剪辮論—

清末民初(19世紀後半～20世紀初頭)の「中国」では、放足(纏足を解く)、剪辮(辮髪を剪る)、易服(服装を変える)、兵式体操といった一連の「身体改造」が、日本と欧米に倣うという知識人たちの言説に基づき、男性と女性に分けて行われた。男性には剪辮と易服と兵式体操、女性には放足が進められたのである。女性の身体改造が「女性解放」というコンテキストにおいて説かれてきたのに対し、男性の身体改造は「新しい男性性・男性像」の創造という観点で論じることができる。身体の一部である髪形、とりわけ辮髪は、清末民初の身体改造運動のなかでは特殊な位置を占める。それは、男性の身体や男性性ととも語ることもできる一方、民族間——すなわち漢民族と満州族——の対立という文脈で論じられることもできる。

辮髪を剪ることをめぐる議論(以下は「剪辮論」と称する)は、辛亥革命(1911-1912)を境にその意味が大きく変わった。辛亥革命以前、剪辮は「衛生」「外国との有効的な外交」「尚武の風習の形成」「女性との性差の再構成」などと結びつけられたが、革命以降は孫文を代表とする革命派により「反満」「清朝打倒」といったような濃厚な政治的色彩がつけられた(吉澤, 1997)。民族対立とかかわった理由は、辮髪が元来漢民族の男性の髪型ではなく(漢の時代以来、総髪はほとんどであった)、満州族、モンゴル族、鮮卑族のような遊牧民族が特有する髪型であったにもかかわらず、満州族が中原に入って間もなく、政治支配と民族同化を狙った「薙髮令」を發布し漢民族の男性に辮髪を強制したからである。革命以降は、漢民族が政治支配のために民族同化を実施し、満州族の辮髪を切った。満州族による支配の象徴である辮髪を切り落とすことは、満州族の男性性の象徴を覆し「新しい漢民族の男性性を創り出す」(西洋や日本の「尚武的男性性」を倣うもの)という「覇権の交代」をも意味した。それは、政権あるいは覇権の交代の際に、男性の身体が政治的意図のもとでいかに利用されたという問題として読み解くことができよう。

本報告では、当時の知識人たちの言説および『臨時政府公報』『萬國公報』『民立報』などの刊行物を史料とし、男性の髪型の変化——とりわけ剪辮(断髪)——に焦点をあて、満州族と漢民族にとってのそれぞれの男性の髪形が持たされる意味を考察したうえで、辛亥革命前後の「剪辮論」についての分析を通じて、「政治/覇権の交代のさいに、男性の身体はいかにプロパガンダとされたか」という問題を明らかにしたい。

◆ 齊藤 利彦 (学習院大学)

「誉れの少女」と戦争

アジア・太平洋戦争において「名誉の戦死」をした兵士、すなわち「護国の神」として靖国神社に祀られた戦歿兵士の遺児たちは、「誉れの子」と呼ばれた。その名称は、軍事保護院副総裁・文部次官通牒「生徒児童ニ対スル軍人援護教育ノ徹底ニ関スル件」（一九四〇年二月二七日）に示された「軍人ノ遺族及家族ガ益々其ノ家門ノ誉レヲ顕彰シ家庭ノ護リヲ固ウシテ国民タル本分ヲ全ウスルコトノ国家的意義及協力支援ノ必要ナル」を受け、「家門ノ誉レ」を体現する者という意味に由来していた。また、靖国神社に父の「神霊」が祀られているとされたことから、「靖国の子」「靖国の遺児」と呼ばれることもあった。そして、そのほぼ半数は少女、すなわち「誉れの少女」であった。

一九三九（昭和十四）年から、恩賜財団軍人援護会の主宰の下に「社頭の対面」という大規模な国家行事が開始され、全国各地の「誉れの子」たちが九段の靖国神社に参拝し、父の「神霊」に直面することが行なわれた。

戦時下の日本にあって、例えば第四回「社頭の対面」（一九四二年）だけでも、台湾、朝鮮、満洲、関東州、樺太も含め、北海道、九州、沖縄の各地から五〇〇〇人を超える「誉れの子」たちが続々と靖国神社に参集した。軍人援護会の機関誌『軍人援護』（第四巻四号一九四二年）によれば、第四回「遺児参拝事業」までの参拝遺児は、「総計一万三千余名」であり、それに第五回の参拝遺児四八五九名を合わせて、総計約一八〇〇〇名の「誉れの子」たちが「社頭の対面」に参加したことになる。

「誉れの子」たちは、戦死した父の名を辱めないように、他の子どもたちの模範であれとされ、そのため父の死について綴った作文には、「私共の父が興亜の聖戦に身を捧げましたことは天皇陛下の臣民としての道を尽くしたに過ぎないのでありまして、言わば当然のことでありまして、天皇陛下の有難い御思召に依りまして、靖国神社に祀られたことは、臣下として無常の光栄であります。」といった内容が多く書かれている。日本の戦前がたどりついた最終の地点が、戦争での父の死を子どもたちに「当然のこと」「無常の光栄」と言わせるものであったことを見逃してはならない。なお、一九四四年に入ると、戦局の急迫と空襲の危険により、靖国神社での遺児参拝事業は中止されるに至った。

本研究は、こうした「誉れの子」たちの中で、特に少女（「誉れの少女」）に着目し、彼女たちが父の死をどう受けとめ、父を失った家族の生計をどう担い、さらには自分の生き方をどう考えたのかを、「社頭の対面」の後に綴った作文をとおして明らかにしていく。

その際、いわば「誉れの少年」たちの意識との異同、また戦前から戦後にかけての意識の変化をも検討する。

◆劉 ムヨウ（奈良女子大学）

戦後の新選組表象を読み解く——「戦う男」から「殉死する」男へ

戦前の日本軍は女性に対して排他的であり、また軍隊及び戦場は男らしさを確認する場として位置づけられる。戦時の「戦う男性」の表象は、抒情詩、軍歌、文学作品、映画などのメディアで大量に作り出され、階層を越えて受容されていった。その中でも、幕末に実在した旧幕府側の武装組織新選組の表象は、歴史的な政治対立があたかも無化されたように、現在まで違和感なく受容され、戦後は英雄像にまで変化した。

本発表は、新選組像を戦前の言説を参照しつつ、彼らが「最後の武士（＝英雄）」として書き換えられた要因と、その英雄像が果たす役割を明らかにすることを目的とする。

英雄としての新選組像の形成は、戦前の軍隊まで遡ることができる。国民皆兵の日本軍において、兵士には天皇の臣下であることが求められた。平民出身兵士の「爆弾三勇士」が勇敢な兵士として宣伝される一方、明治維新後に「逆賊」として受容されたはずの新選組は、国家の全体主義が急速に進む中で、政治的立場の差異が存在しないかのように戦時プロパガンダに用いられた。戦前の新聞記事や兵士の手記の調査から、新選組を軍隊、警察部隊、政府組織と関連づけるニュースと事例が多数存在し、階級を越えて「守り」「戦う」という機能を持つ勇敢なる男性集団として描き出されたことが明らかになった。新選組は戦時中の男性国民を駆り立てるために好都合な物語として認識されたのである。さらに戦争末期、天皇直属の第三四三海軍特別航空部隊の三〇一戦闘小隊は「新選組」という名を久邇宮から名付けられ、士気高揚と競争心を煽る効果がそこに確認できる。このことから、男性国民を戦争へ向かわせる一つのプロパガンダとして成立された、

極めて男性的なテーマだったことが確認できる。

戦前から戦中のこのような傾向は戦後の新選組作品の特徴にも見られ、寧ろ戦後の新選組は戦前から描かれた「戦う男性」を更に昇華したものとなった。戦後を代表する作品は司馬遼太郎の『燃えよ剣』と『新選組血風録』である。司馬の新選組像は、副長土方歳三と一番隊隊長沖田総司の描き方を通じて、「殉死」と「若さ」という二つの要素を獲得し、これは戦時中に犠牲となった若い兵士、特に「軍神」として扱われた爆弾三勇士や特別攻撃部隊のような平民男性たちの物語の系譜上にある。戦後の日本社会では、特に GHQ の検閲下において勇敢な戦死者の美化はタブー視されたが、新選組を代替表象とすることによって再びそれが可能になっていった。以上の点から、新選組の戦後の英雄化は戦前からの連続性を持ち、それを梃にして若き戦死者の美談が復活することを明らかにし、表象としての新選組が戦後日本社会において果たした役割とその意味を示す。

◆前川 直哉 (福島大学)

1980 年代の若年男性向け雑誌における恋愛のゲーム化と消費扇動

本発表では若年男性向け雑誌『ホットドッグ・プレス』（講談社、以下『HDP』）の 1979 年～80 年代の誌面を調査し、同誌において恋愛がどのように扱われていたか、またその扱いはどのように変化したかを検証する。

『HDP』は 1979 年、先行する雑誌『ポパイ』を追う形で創刊されたが、当初は恋愛や「モテ」について言及されることは少なかった。創刊期の『HDP』は読者を消費の主体と見なし、消費に駆り立てようとするカタログ雑誌の側面が強かった。とりわけ「何か一つの趣味・レジャーについて魅力やテクニックを詳しく教示し、関連する商品を大量に紹介する」という編集スタイルは早くに確立されていた。

1980 年代に入ると『HDP』では恋愛についての特集が増加し、教導調の文章やチェックシート等の多用による「恋愛マニュアル」化が進む。ここでは先述のような編集スタイルが踏襲され、恋愛マニュアルとしての『HDP』の大きな特徴は、「～～すべし」「～～がオススメ」「～～は NG」などのテクニック教示と、消費を促す「カタログ」が巧みに一体化されている点にあった。

『HDP』において恋愛は攻略すべき一種のゲームのように扱われ、『HDP』はそのゲームを攻略するための必勝法やテクニックが満載されたマニュアルであった。同誌において恋愛というゲームは誰もが参加でき、上達し必勝法を身につければ全ての人クリアできるかのように描かれていた。そしてこのゲームの攻略には様々なアイテムが必須とされ、『HDP』はカタログ雑誌としてそれらのアイテムを値段・ショッピングリスト付きで掲載し、読者を消費へと煽り立てたのである。ただし『HDP』において恋愛は主要コンテンツとなったものの、同誌が結婚について言及することはほとんどなかった。

恋愛マニュアルとしての『HDP』の正当性を担保するために動員されたのが、「女のコの声」であった。同誌は「女のコ 100 人への徹底調査」などに基づく数値データやグラフを多用した。『HDP』において「女のコ」は、男性の前で本音をなかなか見せないミステリアスな存在として描かれており、その「攻略法」や「ウラワザ」を『HDP』読者だけに特別に教えてあげる、という構図を作り上げることで恋愛マニュアルとしての正当性を高めていた。ここでは「人それぞれだから、相手に聞こう」という指南はなされなかった。また「女のコの声」が動員されたのは、恋愛マニュアルとしての正当性を高めるためだけではない。それは「女のコはこれを喜ぶ、これを欲しがっている」という指南の形を取りつつ、消費扇動の大義名分にもなった。

本発表では実際の『HDP』誌面を分析しつつ、1980 年代の若年男性向け雑誌において恋愛がどのように描かれたか、またそれが読者の恋愛観にどのような影響を与えた可能性があるかを、ジェンダー／セクシュアリティ史の観点から考察する。

部会 E

【個人報告】

◆上尾 さと子 (奈良女子大学)

ジェンダーから見た中国残留孤児 — 女性比率に着目して

中国残留孤児とは、中国東北地区(旧満洲)において、太平洋戦争終了時、逃避行やその後の収容所生活の中で幼くして親と別れ、取り残された 12 才以下の日本人の子どもをいう。日本政府の公式発表によると孤児総数は 2,818 人である (厚生労働省統計 HP、2018.10.31)。なお、中国側資料では 4,000 人以上である (関亜新・張志坤『日本遺孤調査研究』、社会科学文献出版社、2005 年)。

1981 年から始まった中国残留孤児集団訪日調査が当時、世間から注目をあびたこともあって、中国残留孤児に関する図書も数多く出版されている。たとえば、蘭信三編『中国帰国者の生活世界』(行路社、2000 年)、井出孫六『終わりなき旅「中国残留孤児」の歴史と現在』(岩波書店、2004 年)、大久保真紀『中国残留日本人—「棄民」の経過と、帰国後の苦難』(高文研、2006 年) 等である。それらの多くは、中国残留孤児問題をマイノリティーの社会問題として捉え、その解決のための視点から叙述したものである。しかし、ジェンダーの視点から中国残留孤児問題を論じた研究については管見の及ぶところ見当たらない。そもそも、中国残留孤児の女性の正確な人数すら明らかでない現状があった。

まず、厚生労働省等関係機関には女性人数に関する統計がない。集団訪日調査における厚生省の発表・新聞報道を確認したものの 1981~1993 年、30 回実施された内の 24 回目までの公開身元調査名簿では、氏名の下に肉親と別れた場所・1945 年 8 月当時の推定年齢・日本名・家族構成・父母の職業・避難状況・身体的特徴・血液型・多くの場合は写真も掲載されているが、性別のみ記載がない。この種の公開身元調査においては、性別は基本事項といえようが、当時、残留孤児はひとくくりであり、性別による差違は問題とされていなかったことがわかる。1994~1999 年、補充第 10 回目 (調査の 25 回目) から氏名の下に性別欄が記載されるようになる。

発表者は、今回、集団訪日調査の男女数と集団訪日調査を含む全体の男女数を厚生労働省中国残留邦人等支援室に正式に依頼し、その情報について提供を受けた (2017.11.2、2018.12.3)。

本発表では、この男女数をもとに分析し、次の二点について考えたい。第一に中国残留孤児全体の男女比率は不均衡があり、中国残留孤児は著しく女性が多いこと、およびその理由。第二に集団訪日調査の男女比率は一定の傾向があり、集団訪日調査の後半になると女性が多くなること、およびその理由。

さらに日本政府の対応にもジェンダーバイアスがあり、帰国旅費制度における不平等についても考えたい。

◆山下英愛 (文教大学)

北朝鮮女性の生活に関する研究~韓国における先行研究を中心に~

本報告の目的は、朝鮮民主主義人民共和国 (以下、北朝鮮) に暮らす女性たちの生活とジェンダーを研究するための基礎的作業として、韓国の先行研究を整理し、その特徴を明らかにすることである。

1. 北朝鮮研究をめぐる制約

韓国の先行研究を論じる前に、韓国で北朝鮮を研究することの制約について触れておきたい。朝鮮半島は半世紀以上にわたって分断と休戦状態に置かれており、韓国では長年北朝鮮の研究を行うこと自体が法的にも情情的にも資料へのアクセスという点でも自由ではなかった。そのため、北朝鮮 (北韓) 研究が学術領域で本格的に始まるのは国内の民主化と東西冷戦終結後の 1990 年代初頭になってからである。政府は民主化宣言から 2 年後の 1989 年、統一部の傘下に北韓資料センターを開設し、北朝鮮に関連する資料の一部を一般の人々に公開するようになった。また、南北融和の兆しの中で、主要大学は北韓学研究コースを大学院に設置した。金大中政権発足 (1998) 後は首脳会談の開催、金剛山観光などが開始され、北朝鮮に対する関心が一層高まった。この時期に北朝鮮研究は北韓学/統一学として研究領域の一つとして確立されるようになった。だが、李明博・朴槿恵両政権時代になって対北関係が冷え込むと、北韓学研究コースも統廃合されるなど影響を受けた。近年は文在寅政権 (2017~) の積極的な南北融和政策と金正恩政権への関心の高まりによって、北朝鮮研究は再び活性化の時期を迎えている。

2. 北朝鮮女性/ジェンダー研究

北朝鮮の女性及びジェンダーに関する研究はこのような流れの中で進展してきた。その先鞭をつけたのは李兌榮（イ・テヨン）である。女性初の弁護士として家族法改正運動のリーダーだった李は、軍事政権時代の1977年にみずから統一院長官を訪ね、北朝鮮の女性に関する調査研究を申し出た。李はその成果として『北韓調査研究—北韓の女性に関する研究』（1979）を發表し、その後も引き続き内容を補充して、『北韓の女性生活』（1981）と『北韓女性』（1987）を出版した。

90年代に入ると女性運動の一環として南北の女性リーダーたちの交流が始まり、北朝鮮の女性たちに対する関心が急速に高まった。研究者たちも李兌榮の研究成果を土台として、北朝鮮女性の法的地位や生活全般に関して様々な論文を書き、書籍も出版された。女性学研究の中心的存在であった梨花女子大学も大学院に北韓学協同課程（1998）を開設した。2000年代以降の北朝鮮女性研究は、研究対象が家族、社会生活、セクシュアリティ、ジェンダーなど徐々に広がり、多様化している。近年は北朝鮮の映画やドラマを通じた女性表象分析なども行われている。

3. この報告が目指すもの

本報告は、北朝鮮女性の生活に関する韓国の先行研究を整理することを第一の課題とするが、同時に韓国の女性学研究の歴史の一部を示すことにもつながると考えている。また、韓国でのような制約を受けない日本で北朝鮮女性研究が不在であったことの意味を問いつつ、朝鮮半島全体を視野に入れたジェンダー研究の活性化をうながすきっかけにしたい。なお、本研究は「北朝鮮ドラマとジェンダーに関する基礎的研究」（科研基盤研究C、2017～2020年度）の一環である。

【パネル報告】

日中開戦前の女性たちによる平和運動の模索——月曜クラブと一土会を中心に

石川 照子（大妻女子大学） 司会者および報告者

須藤 瑞代（京都産業大学）

姚 毅（東京大学）

山崎 眞紀子（日本大学）

<主旨説明>

本報告の目的は、日中戦争前の時期、すなわち1920年代末から1930年代において、日本の女性知識人たちの議論と交流の場であった「月曜クラブ」および、そこから発展して作られた、隣国中国を知ることを目指した「一土会」という、関連する二つの女性グループの活動を明らかにし、そこで模索されていた日中間の平和を希求する活動について考察することである。

「月曜クラブ」とは、東京朝日新聞社の学芸部の主催という形で、1928年3月にスタートした女性たちの研究会である。市川房枝、林芙美子、村岡花子、岡本かの子、田村（佐藤）俊子、金子（山高）しげり等、日本の女性運動に携わる名だたる女性たち・女性文学者たちが集まって、互いに運動方針や研究事項を發表・批評し、時には時事問題の専門家を招いて討論をした。緊張感を増す国際関係・社会の現況を知り、男性中心の偏向した視点を女性の眼で見直し、声を上げていこうとする一つの実践であった。

「一土会」は、1931年10月に、この月曜クラブから派生した、中華民国を語ることに特化した会である。前月に満洲事変が勃発し、日中関係に危機感を感じた月曜クラブの有志たちから「中華民国の婦人を知る道を拓こう」という意見が出て結成されたものである。この会にも、市川房枝、高良とみ、久布白落実、平塚明子（らいてう）、加藤タカなどが名を連ねている。

月曜クラブおよび一土会には、次の四つの特色がある。

第一に、月曜クラブ・一土会で実質的に幹事の役割を果たしていた竹中繁（東京朝日新聞初の女性記者）の存在が大きかったこと、第二に、とくに一土会の活動には多くの中国人が参加しており、規模は小さくとも日中をつなぐネットワークの一つとなっていたこと、第三に、月曜クラブ・一土会の参加者にはキリスト教徒が多く含まれており、キリスト教ネットワークとしての側面も有していたこと、第四に、とくに月曜クラブには、女性文学者が多数集まっており、女性文学者のネットワークの一つとしても機能していたことである。

本パネルでは、以上四つの特色それぞれを、各報告によってより詳細に分析し、これまでほとんど注目されてこなかった「月曜クラブ」および「一土会」の意義と限界を明らかにする。

なお、本研究会は、2014～2017年には「近代日中女性関係史におけるジェンダー構築の総合的研究——竹中繁を中心として」(JSPS 科研費 JP26360052 研究代表者：山崎眞紀子)の助成を受けて研究活動を行い、2018年には『女性記者・竹中繁のつないだ近代中国と日本——一九二六～二七年の中国旅行日記を中心に』(科研費学術図書出版助成 17HP5091 研文出版)を刊行した。現在は「ジェンダーからみる近代日中女性関係史の総合的研究——月曜クラブと一土会を中心に」(JSPS 科研費 JP17K02085 研究代表者：石川照子、2017～2020年)の助成を受けており、今回のパネルもその研究活動の一環である。

報告者①

須藤 瑞代 (京都産業大学)

竹中繁と月曜クラブ・一土会

本報告では、まず「月曜クラブ」と「一土会」の実質的幹事であった竹中繁について考察する。竹中は、東京朝日新聞初の女性記者であり、在職中に1926～27年の半年間にわたって大連・奉天・北京・天津・上海・香港などを周る旅をし、その時出会った中国の女性たちとは帰国後も交流を続けていた。帰国後には、日中双方の新聞・雑誌に互いの女性の状況について寄稿するなど、国家間関係の悪化のさなかに、日中の女性同士の相互理解、連帯を目指した活動を行った。こうした活動を行った日本人女性ジャーナリストは、他に例をみない。そこでまず、こうした竹中の活動の意義について検討する。

その上で、竹中が実質的な幹事として運営した「月曜クラブ」と「一土会」について、両会についての竹中繁の残した記録を分析し、毎回の出席者、テーマ、議論の内容などを調査し、会の活動を明らかにする。当時、日本の女性知識人たちの目は、中国ではなく、主として欧米の女性たちの動向に向けられていた。欧米の「先進的な」フェミニズムへの関心が高く、中国の女性に対する関心は相対的に低かったと言えるだろう。しかし、「月曜クラブ」では満州事変後中国の女性を知ろうという意見が出て、それがすぐに「一土会」の結成につながっている。こうした女性たちの中国への関心と日中関係に対する憂慮が、会の活動にどのように表れているのかを、竹中および各メンバー個々人の活動も整理しながら考察する。

報告者②

姚 毅 (東京大学)

日中双方の女性同士の模索及び限界

「一土会」は、1931年10月に、満洲事変勃発後、険しくなっていく日中関係に危機感を感じた月曜クラブの有志たちが結成したものである。中国で見聞のある竹中繁、服部升子の外に、市川房枝、高良とみ、久布白落実、平塚明子、加藤タカなど錚々たる女性たちが集まった。会の活動は、中国の事情に詳しい専門家、有識者を招いて勉強会を開く他に、主に以下のものがあつた。①高良とみ、久布白落実、服部升子(正田淑子と一緒に)、市川房枝等が直接に中国に行つて考察し中国女性との交流を図り、また留学生の帥雲風に自分たちの思いを託して伝えてもらつたりした。②陳衡哲、劉王立明の外に、上海YWCAの張雪岩・南京金陵女子大の学生李子真など来日した中国の女性知識人との交流。③留学生を招いて会に参加させたり、自宅でもてなしたり、経済的支援をしたりした。④空閑少佐を救つた甘海瀾氏一家との交流など。

本報告は、こうした活動の経緯と内容を辿り、それが同時期の日本の平和活動と比べて如何なる特徴を持っていたのかを明らかにする。それと同時に、陳衡哲、劉王立明など中国の女性知識人との交流の行方を追い、「民族＝ナショナリズム」を背負いながらの女性たちの国境を超える交流の限界に迫る。

報告者③

石川 照子 (大妻女子大学)

日中女性のキリスト教ネットワーク

月曜クラブと一土会の活動と思想を考える時、キリスト教の要素は大変重要である。両会の実施的幹事であった竹中繁自身がクリスチャンであり、日中戦争中にYWCA日本同盟の総幹事を務めた加藤タカは、会の常連メンバーでしばしば会合の会場としてYWCAを提供した。他にも久布白落実、ガントレット恒子、河井道子、藤田たき、星野あい、村岡花子等のクリスチャンたちの名前を見出すことができる。

そもそもキリスト教は、人道主義にもとづく全人類の救済をその使命としており、日中のキリスト教徒もまた、共通の信仰によって結ばれた神の前の兄弟姉妹たちであった。例えば日中両YWCAは1920年代から30年代半ばまで、日中相互の大会や会議への参加や相互訪問を行い、両会の機関誌には双方の交流を伝える記事や訪問記が掲載されていた。一土会も上海YWCAの張雪岩との交流を行っている。

しかし近代以降の日中両国のナショナリズムの台頭は、双方の間に摩擦や対立を生みだし、やがて日本の侵略を受けて全面戦争が勃発することとなる。そうした日中両国の関係が緊張と悪化をたどっていった開戦前、クリスチャン女性たちは何を思い、どう在ったのだろうか。

本報告では、月曜クラブと一土会に集ったクリスチャンの女性たちの活動と思想を整理して、それぞれの背景を探っていく。その上で、他の女性キリスト教団体の活動を参照しつつ、月曜クラブと一土会の特色を検討していく。

報告者④

山崎 眞紀子 (日本大学)

月曜クラブに集まった女性文学者たちの活動

月曜クラブは、女性文学者たちの参加も多く見られる。生田花世、板垣直子、岡本かの子、小寺菊子、佐藤(田村)俊子、中条(宮本)百合子、林芙美子、平林たい子、深尾須磨子、野上弥生子、村岡花子、湯浅芳子、吉屋信子などである。

本発表では、当時の彼女たちの背景を確認し、月曜クラブに何を求めて参加し、そして、どのような活動へと向かっていったのかを考察する。一例としてあげたいのは、佐藤(田村)俊子(1884年～1945年)である。彼女は、かつて『青鞥』同人として交流のあった富本一枝(尾竹紅吉)の紹介で月曜クラブに参加し、4回ほど出席している。初回は1936年11月23日であり、8か月前に18年間過ごしたバンクーバーから帰国したばかりであった。彼女はすぐに文壇に返り咲き、月曜クラブに参加していた1937年、1938年は旺盛に文筆活動を行っていた。だが、日本にとどまっていたのは3年間のみで1938年12月には中国に渡って活動し、一度も帰国しないまま1945年4月に上海で客死した。敢えて直線的に見れば、カナダから帰国したばかりの彼女が、月曜クラブで接した時事問題や平和の模索活動によって、結果的には彼女を中国に向かわせたということも可能なのかもしれない。

本報告では、月曜クラブに参加した女性文学者たちの活動を見ていくことで、月曜クラブが育んだ平和運動が女性文学者たちにどのように受けとめられ、その後の活動を生んでいったのかを検討していく。